

# 伊方原発再稼働 これだけの危険

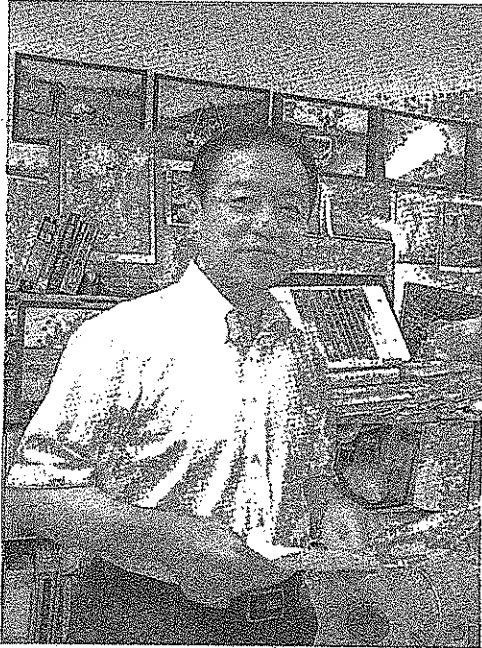
八旗

高知大学防災推進センター特任教授 岡村 真さん

再稼働に反対する国民多数の声を押し切り四国電力は12日に伊方原発3号機(愛媛県伊方町)の再稼働を強行しようとしています。愛媛県伊予市沖や別府湾などで海底の断層帯

を調べてきた高知大学防災推進センター特任教授の岡村真さんは、「自然に対して傲慢だ」と警鐘を鳴らします。

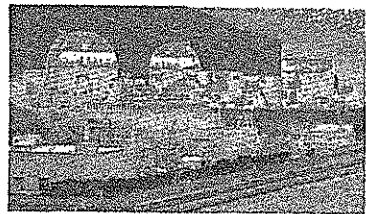
(聞き手 三木利博)



中央構造線は1000年当たり8回繰り返していることがわかっていますが、次の地震がどのくらい大きいか、いつ起きるのか、今の地震学ではわかりません。

## 過去に大地震 日本最大の活断層 中央構造線が間近に

おかむら・まこと 専門は地震地質学、長期地震予測研究。海底の断層を探し、活断層の地震の起こり方を調査し、沿岸湖沼の津波堆積物を調査し、南海トラフで起きた過去の地震の活動履歴を研究。内閣府「南海トラフの巨大地震モデル検討有識者会議」委員、中央防災会議「東北地方太平洋沖地震を教訓とした地震・津波対策に関する専門調査会」委員、高知県南海地震長期浸水対策検討会委員など歴任。



再稼働をめぐり四国電力伊方原発3号機(左)と中央構造線伊方町

四国電力は「中央構造線の性状を十分に把握した」と主張していますが、科学的な根拠とは相いれない。このような電力会社の不適切な態度が福島原発事故を招いたのです。

岡村 私たちが調査したのは1000年以内の約10万年前に別府湾や伊予灘の海底を音波探査したら、断層帯が確認された。2000年前以降に動いていると見つけられなかった。驚きました。危険な原発を動かす電力会社が、こんなに簡単にわかるものを見逃すのかと。私の原稿はそこで

四国電力は3号機増設の申請(1984年)で、敷地前面海域の断層帯は動いていないと主張し、国も認め、建設されました。

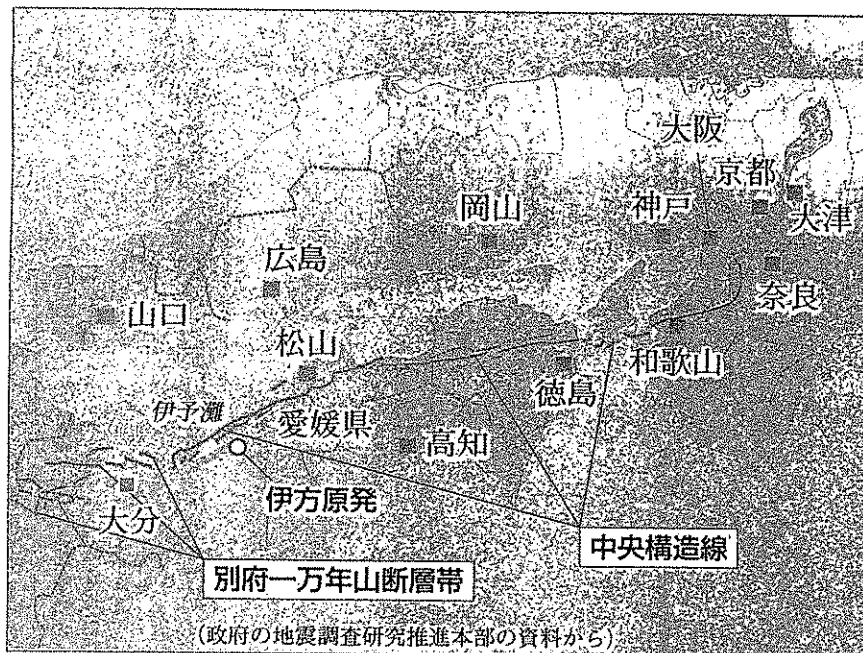
その時点で、原発の問題点などについて積極的に考えてはいませんでした。が、非特許で、電力会社がどれほど精緻な検討をしたとしても信用できなかりました。四国電力が海底の活断層の存在を認めなかったのは、私の知る限り97年以降です。

### 地震動は妥当か

岡村 もともと伊方原発3号機は、活断層がないという前提で造られ、基準地震動は4.73ガル(ガルは、揺れの強さを表す加速度の単位)でした。現在の基準地震動は6.00ガルです。これは妥当でしょうか。たとえば2011年の東北地方太平洋沖地震の際、震源断層から50キロ離れた東北電力女川原発(宮城県)で6.36ガルが観測されました。日本最大の活断層の震源断層に極めて近い

位置にある伊方原発の基準地震動がそれと同程度のものです。厳格に評価されたか疑問です。四国電力は中央構造線の長さを480キロに検討したといっています。断層の傾きなど不確定な要素を伊方原発に不利な形で同時に重ねた計算をしていません。原発災害の深刻さを考えれば、最も不

利な想定をすべきです。地震の大きさだけではありません。中央構造線の中で、ずれの量が一番大きい場所が伊方原発の沖にあることです。地震を感知してから、原子炉を停止するための制御棒を操作するまでに時間的な余裕が少ない。そういう問題もありま



(政府の地震調査研究推進本部の資料から)

地盤の強い揺れを観測する。日本の原発がそうした観測の前に造られたことに、根本の問題があると思っ

ています。それを小手先の補強で動かすのは、自然に対してあまりにも傲慢だし、許されないと感じています。

避難計画の実効性が検証されないなど再稼働までのプロセスも問題です。

### 避難できるのか

岡村 福島原発事故の状況を考えると、再稼働の是非を立地自治体だけの狭い範囲で議論してもだめだと思っ

ています。また事故は複合災害の中で起る前提で考えなければいけません。四国は有数の地滑り多発地帯です。地震が起れば、大規模な斜面崩壊、岩盤崩壊が発生し、道路も損壊します。津波が来れば船は出ない。地震が起きた後、たくさんの方がほんとうに避難できるのでしょうか。日本という国は本来、地震列島の上にあることを世界にアピールして、「原発はゼロにします」「再生可能エネルギーなどの技術に積極的に投資します」と宣言すべきではないでしょうか。世界的な日本の立ち位置としてそれが当然だと思っ